

千葉大学 一般 前期

平成 23 年度入学者選抜学力検査問題

理 科

物 理 1 ページ～ 21 ページ

化 学 22 ページ～ 34 ページ

生 物 35 ページ～ 63 ページ

地 学 64 ページ～ 71 ページ

注 意 事 項

1. この冊子は、監督者から解答を始めるよう合図があるまで開いてはいけません。
2. 監督者から指示があったら、解答用紙の上部の所定欄には受験番号、座席番号を、また、下部の所定欄には座席番号をそれぞれ必ず記入しなさい。その他の欄には記入してはいけません。
3. 選択科目として届け出た科目について解答しなさい。それ以外の科目について解答すると失格となります。
4. 解答すべき問題の番号は、各学部・学科ごとに異なるので、各科目の最初にかいてある注意事項の表で確認しなさい。
5. この冊子の余白の部分を計算、下書きに使用してもかまいません。
6. 解答用紙は、記入の有無にかかわらず、持ち帰ってはいけません。
7. この冊子は持ち帰ってかまいません。
8. 落丁、乱丁、または印刷の不備なものがあったら申し出なさい。

化 学

注意 1. 志望学部・学科により、以下に示す番号の問題を解答すること。

志 望 す る 学 部 ・ 学 科	解 答 す る 問 題 番 号
教 育 学 部 志望者のうち化学を選択する者	☐ 3 ☐ 5 ☐ 6
理 学 部 化学科を志望する者	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 6
理 学 部 地球科学科志望者のうち化学を選択する者	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 5
医 学 部 志望者のうち化学を選択する者	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 5 ☐ 6
	私費外国人留学生 ☐ 3 ☐ 5
薬 学 部	☐ 1 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5
看 護 学 部 志望者のうち化学を選択する者	☐ 3 ☐ 5 ☐ 6
工 学 部 志望者のうち化学を選択する者	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5
園 芸 学 部 志望者のうち化学を選択する者	☐ 3 ☐ 5 ☐ 6
先 進 科 学 プログラム (方式Ⅱ) 物理化学分野志望者のうち化学を選択する者	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5 ☐ 6
先 進 科 学 プログラム (方式Ⅱ) ナノサイエンス分野および画像科学分野志望者のうち化学を選択する者	☐ 1 ☐ 2 ☐ 3 ☐ 4 ☐ 5

2. 解答はすべて所定の解答用紙に記入すること。

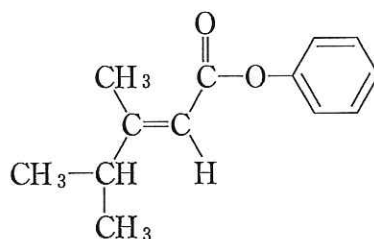
3. 必要があれば次の数値を用いなさい。

原子量：H = 1.0, C = 12.0, N = 14.0, O = 16.0, Ca = 40.1

Zn = 65.4, Ag = 107.9

アボガドロ定数： $6.02 \times 10^{23}/\text{mol}$

4. 構造式は下の例にならって解答しなさい。



- 1 実在気体の状態方程式として次のファンデルワールスの状態方程式がよく使われている。温度(絶対温度) T 、1 mol あたりの体積 V 、圧力 P の間に次の関係が成立する。 R は気体定数である。

$$\left(P + \frac{a}{V^2}\right)(V - b) = RT$$

a は分子間力によって決まる定数、 b は分子の大きさを反映した定数とともに正である。理想気体からのずれを議論するための量 Z を次のように定義する。

$$Z = \frac{PV}{RT}$$

理想気体では常に $Z = 1$ である。以下の問い(問 1 ～ 5)に答えなさい。

- 問 1 ファンデルワールスの状態方程式を用い、 Z が次式で表されることを示しなさい。

$$Z = \frac{V}{V - b} - \frac{a}{VRT}$$

- 問 2 同じ体積、同じ温度で He と Ar の 2 種類の気体を考える。分子間力を無視した場合、どちらの気体の Z が 1 に近い値になるか。理由とともに答えなさい。

- 問 3 温度 T を一定のもとで、圧力 P を下げて体積 V を非常に大きくすると Z は 1 に近づき理想気体とみなせる。そのことを説明しなさい。

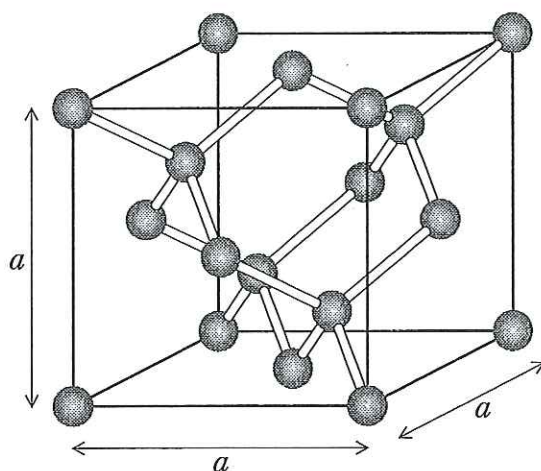
- 問 4 温度 T を一定のもとで、理想気体とみなせる問 3 の場合より圧力 P をわずかに上げて体積 V を小さくする。このとき He や N_2 のような極性のない原子・分子からなる気体では Z が 1 より大きい。その理由を説明しなさい。また NH_3 のような極性のある分子からなる気体では Z が 1 より少し小さい。その理由を説明しなさい。

- 問 5 問 4 で NH_3 のような気体では Z が 1 より少し小さかった。体積 V 一定のもとでさらに温度を下げると Z の 1 からのずれは大きくなるか、それとも小さくなるか。理由とともに答えなさい。

2 水に関する次の文章を読み、以下の問い(問1～6)に答えなさい。

水分子は最外殻電子数6の酸素原子1個と最外殻電子数1の水素原子2個から成り立っており、O—H単結合を二つもつことから、1分子あたりの共有電子対は 対、非共有電子対は 対である。このため、H—O—Hがなす角度は °となっている。液体の水はわずかに H^+ と OH^- に電離しているが、 H^+ は1分子の水分子と結合して イオンを形成している。^①

水をプラスチック容器一杯に入れて凍らせると、容器が膨張する。この現象は、水以外のほとんどの物質が、液体から固体になると体積が減少し密度は大きくなるのとは異なる。この理由を氷の結晶構造から考えてみよう。1個の水分子がまわりの 個の水分子と水素結合し、酸素原子を頂点とする正四面体構造をとる。ダイヤモンドや などの単体は図のような正四面体構造をとるが、氷では図の原子の位置に酸素原子があると考えればよい。氷では酸素原子間の距離は $2.76 \times 10^{-8} \text{ cm}$ 、隣接する三つの酸素原子がなす角度 θ (たとえば—O—H $\cdots$ O—H $\cdots$ O—の結合)は $\cos \theta = -\frac{1}{3}$ を満たしているので、図の単位格子の体積 a^3 は $\times (2.76 \times 10^{-8})^3 \text{ cm}^3$ となる。一方、単位格子中の水分子数は 個だから、単位格子中の質量は $\times$ $\frac{\text{g}}{6.02 \times 10^{23}}$ となる。この結果から氷の密度が計算でき、水の密度より小さいことがわかる。^② ③



図

問 1 文中の , , にあてはまる数をかきなさい。
また, にあてはまる最も適当な数を (90, 104.5, 120, 180)
の中からえらび, 解答欄の正解を○で囲みなさい。

問 2 文中の , にあてはまる語句をかきなさい。

問 3 下線部①のイオンの構造式を, 非共有電子対も含めてかきなさい。

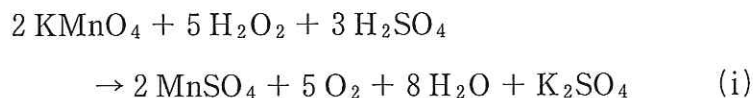
問 4 文中の ~ にあてはまる数をかきなさい。ただし,
 は平方根を含んだままでよい。 は小数点以下 1 けたま
でかきなさい。

問 5 下線部②の密度を計算過程も示し, 有効数字 2 けたで求めなさい。
 $6.02 \times 2.76^3 = 127$, $\sqrt{3} = 1.73$ を用いてもよい。

問 6 下線部③のようになる理由を, 氷の結晶構造と氷が溶けて水となった状態
との違いに注目して説明しなさい。

3 次の文章を読み、以下の問い(問1～7)に答えなさい。

硫酸で酸性にした過マンガン酸カリウム水溶液に、過酸化水素を混合したときの反応



では、マンガンの酸化数が から に変化している。このように、酸化還元反応は酸化数の変化を伴う化学反応であり、ある元素が酸化されたとき、この元素の酸化数は(A)し、還元されると酸化数は(B)する。また、(i)式の反応では過酸化水素は(C)として作用しているが、反応によって は(D)としても働く。

金属と水や酸との酸化還元反応は、金属のイオン化傾向の大きさに応じて反応性が異なる。 金属と呼ばれるナトリウムやカリウムは、イオン化傾向が非常に大きいため、常温の水とも激しく反応する。これらは通常、石油(灯油)の中で保管する。イオン化傾向が よりも大きい亜鉛や鉄は、塩酸や希硫酸と反応して溶解する。一方、イオン化傾向が よりも小さい銅は、硝酸や熱濃硫酸とは反応するものの、塩酸や希硫酸とは反応しない。なお、鉄は銅よりもイオン化傾向が大きい、表面が となるため、鉄は濃硝酸に溶解しない。金はイオン化傾向が非常に小さく、これらの酸とは反応しないが、濃硝酸と濃塩酸を1:3で混合した には溶解する。一方、酸にかえて、金属イオンの溶液に、これよりもイオン化傾向の大きな金属を入れたときにも酸化還元反応が起こる。この場合、イオン化傾向の大きな金属が陽イオンとなって溶け出し、イオン化傾向の小さな金属が析出する。

問1 (A)～(D)に入る適切な語句の組み合わせを、以下の(a)～(d)から選び、記号で答えなさい。

- (a) A—増加, B—減少, C—酸化剤, D—還元剤
- (b) A—増加, B—減少, C—還元剤, D—酸化剤
- (c) A—減少, B—増加, C—酸化剤, D—還元剤
- (d) A—減少, B—増加, C—還元剤, D—酸化剤

問 2 酸化還元反応による酸化数の変化について、

- (1) ア , イ に入る酸化数をかきなさい。
- (2) 二重下線部の、銅と熱濃硫酸の反応について、銅と反応して酸化数が変化する元素の元素名と反応前後の酸化数をかきなさい。

問 3 ウ ~ カ に入る適切な語句をかきなさい。

問 4 下線部①について、酸化還元反応を考えるとときに酸化数が用いられる理由を、40 字以内でかきなさい。

問 5 下線部②に関して、硫酸で酸性にした水溶液中での過酸化水素とヨウ化カリウムの反応の化学反応式をかきなさい。

問 6 下線部③の理由を、40 字以内で説明しなさい。

問 7 下線部④に関して、5.25 g の亜鉛の板を、0.100 mol/L の硝酸銀水溶液 (0.360 L) に浸してしばらく放置したところ、この板の質量が 6.09 g に増加していた。

- (1) この反応のイオン反応式をかきなさい。
- (2) この反応で、何 mol の亜鉛が溶けたか答えなさい。また、反応後に硝酸銀の濃度は何 mol/L になったか答えなさい。なお、計算過程も示し、有効数字 2 けたで答えなさい。

5 次の文章を読み、以下の問い(問1～6)に答えなさい。

分子式が $C_4H_{10}O$ の化合物には、七つの構造異性体が存在する。そのうちの四つはヒドロキシ(ヒドロキシル)基をもつ化合物 A～D であり、残りの三つは① ア 結合(基)をもつ化合物である。化合物 A～D に硫酸酸性の二クロム酸カリウム水溶液を作用させると、化合物 A 以外は酸化された。このとき、直鎖状の化合物 B からは化合物 E が、化合物 C からは化合物 F が、また、化合物 D からは化合物 G が生成した。化合物 E と F は、アンモニア水を加えた硝酸銀水溶液とともに加熱すると銀鏡反応を示したが、化合物 G は銀鏡反応を示さなかった。化合物 G は酢酸カルシウムの乾留(熱分解)により生成する イ ② と同じ官能基をもつ。化合物 G や イ は、化合物 E や F の化合物群と区別され、ウ の名称をもつ化合物群に属する。

化合物 E と F を酸化すると、エ と呼ばれる官能基を持つ化合物が生じた。化合物 E から生成した化合物 H に炭酸水素ナトリウムを反応させると気体が発生した。③ 発生した気体を十分な量の水酸化カルシウムの飽和水溶液に吹き込むと、白色の沈殿が析出した。④ また、化合物 H と化合物 C とを縮合させると化合物 I が生成した。

問 1 文中の ア ～ エ に適切な語句をかきなさい。

問 2 化合物 A～I の構造式をかきなさい。

問 3 下線部①の三つの化合物の構造式をかきなさい。

問 4 下線部②で起こる反応を化学反応式でかきなさい。

問 5 下線部③で起こる反応を化学反応式でかきなさい。

問 6 下線部④で沈殿が 2.50 g 得られた。下線部③で何 g の化合物 H が反応したことになるかを、計算過程も示して、有効数字 2 けたで答えなさい。ただし、下線部③で発生した気体は、下線部④の過程ですべて反応して沈殿を生じ、この沈殿は飽和水酸化カルシウム水溶液にまったく溶けないものとする。

6 次の文章ⅠおよびⅡを読み、以下の問い(問1～5)に答えなさい。

Ⅰ α -アミノ酸は図1に示す一般構造を持つ。タンパク質は α -アミノ酸どうしのペプチド結合と呼ばれる **ア** により形成される重合体である。タンパク質の多くは β -シート構造、すなわち、隣り合う鎖どうしが **イ** を介して多くのポリペプチド鎖が並行に並んだ板状構造をもつ。また、システインの側鎖どうしはジスルフィド結合と呼ばれる **ウ** により、タンパク質分子内または分子間の架橋を形成することがある。一部のタンパク質は、システインに含まれる硫黄原子やヒスチジンに含まれる窒素原子を介して、**エ** によって亜鉛や鉄などと錯イオンを形成している。バリンなどの無極性の側鎖を持つアミノ酸は、側鎖の原子間の接触が最大になるようにタンパク質分子内に密に詰め込まれており、無極性側鎖間の **オ** がタンパク質の立体構造の安定化に寄与している。タンパク質分子内のアスパラギン酸とリシンは水溶液中で電荷をもち、両者間で **カ** を形成してタンパク質の立体構造を安定化している。

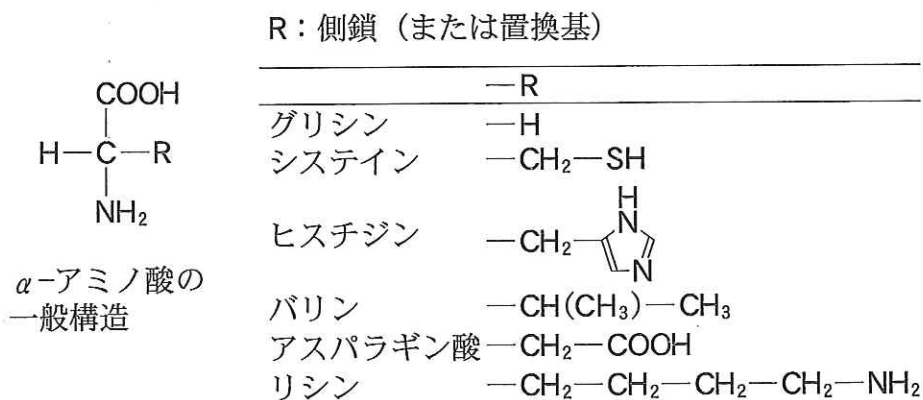


図1

問1 文中の **ア** ～ **カ** にあてはまる最も適切な語句を下から番号で選びなさい。なお、同じ番号を複数回選んでもよい。

- | | | | |
|----------|---------------|---------|---------|
| 1. イオン結合 | 2. 金属結合 | 3. 共有結合 | 4. 配位結合 |
| 5. 水素結合 | 6. ファンデルワールス力 | | |

問 2 2 分子のグリシンが鎖状のジペプチドを形成する化学反応式をかきなさい。また、グリシン 10 分子がペプチド結合でつながった鎖状のペプチドの分子量を求めなさい。計算式も示し、整数で答えなさい。

問 3 図 2 は、あるタンパク質の β -シート構造の一部を示したものである。図中で イ を形成する原子間をすべて点線で結びなさい。

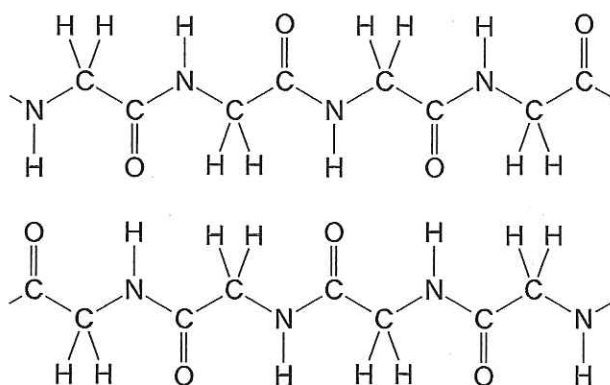


図 2

II アスパラギン酸を、少量の濃硫酸を含むエタノール中で煮沸したところ、アスパラギン酸以外に三つのアスパラギン酸由来の化合物(①～③)が得られた。
これら四つの化合物の混合水溶液の少量を pH 6.0 の緩衝液で湿らせたろ紙の中央(図 3, $\times$ の位置)にたらし、図 3 のように電極を配置して高電圧をかけた。その後、ニンヒドリン溶液を噴霧してドライヤーで加熱したところ、四つの化合物は、点線で囲った A～C どれかの位置に紫色のスポットとして検出された(図 3)。

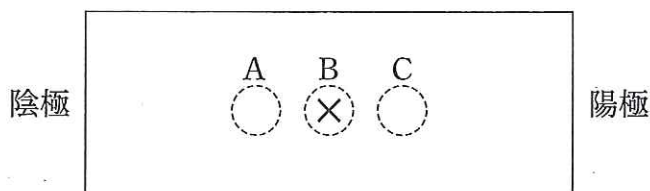


図 3

問 4 下線部の反応で得られたアスパラギン酸由来の化合物(①~③)の構造式をかきなさい。ただし、どの化合物に①~③を対応させるかは任意とし、光学異性体は考慮しない。また、①~③はA~Cのどの位置に検出されたかを答えなさい。

問 5 この実験を pH 6.0 の緩衝液の代わりに pH 1.0 の緩衝液を用いて行ったとすると、問 4 で対応させたアスパラギン酸由来の化合物(①~③)はそれぞれ下の(a)~(c)のどの位置に検出されと考えられるか。また、pH 12.0 の緩衝液を用いた場合はどうなると考えられるか。それぞれ(a)~(c)の記号で答えなさい。

- (a) 最初にたらしした位置より陰極側
- (b) 最初にたらしした位置
- (c) 最初にたらしした位置より陽極側